

雪景色で迎える2学期終了。やはり、季節の移り変わり、カレンダー12月の実感を感じます。20年前、12月8日位に飯綱リゾートスキー場がオープンし（無料開放）、初滑りに行なったことが思い出されます。更に遡り、30年前なら、大地の年長児を連れて、週一度、アルペンスキーを楽しみに出かけていったこともいい思い出です。それだけ、雪、冬という季節がはつきりしていましたし、春夏秋冬それぞれの季節感が鮮明な時代でした。

そんな中でも、一夜にして、世界が変わるという雪景色は、子どもたちにとっては鮮烈です。私たち大人にとっても、朝起きてみる雪景色は、この世が変わったという衝撃を受けます。特に、大地のような場所で暮らしていると、特にすごいインパクトです。樹木が雪男の髪のように雪に覆われ、垂れ下がり、一面真っ白な世界。雪が降り続けている時は、恐怖が先走り、晴れ上がっている時は、カメラを持ってベランダへ、次に、ののはな文庫のベランダへ走ります。午前6時から始まる文庫から見る志賀高原のモルゲンロート。志賀高原の後ろが火事のように赤く燃えてきて、次第に色を変えながら7時前後の日の出を迎える！！この時期の太陽は、文庫から真っ正面です。（例年ならば、コーヒーを飲みながら、早朝からストーブに火をつけ モルゲンロートを楽しむのですが、今年はEXPO2025開催中で、2階空の国がベストですね。年末年始の大地キャンプが、楽しみです）

話は逸れましたが、子どもたちは雪が大好き！！大地は朝から外遊びのリズムの中で、特に、雪の朝の子どもたちのモチベーションは高い。もちろんきっちりとした防寒対策防寒服装なので、準備万端、長時間雪の遊びを満喫できます。それだけで、雪遊びの集中度、豊かさが高まります。雪の世界はファンタジー、まことに遊びまるごとです。ここ数年の面白い遊びは、スコップそり。これまた器用に、スコップにお尻を乗せて、スロープ下まで滑り降りてしまうのです。そんなバリエーション豊かな雪遊びが展開されています。

注意点は一つ。薄着のおすすめと高機能シャツ下着衣類のご遠慮。厚着は身体が身軽に動かせずに怪我の元。体温調節もできにくい。子どもの高機能の服（ほとんど綿ではない）は、寒さから受け身的に守るだけで、寒さ暑さに抵抗できる耐性が育つ子ども自身の身体を作らない。オーガニックな食事同様に、化学繊維の衣類は、子どもの身体にとって自然ではない。やはり、厳しい自然に対応できる身体は、自分自身で作り上げる環境（衣類を含めて）を整えてあげたいものです。親の子どもへの最大のプレゼントは、丈夫な身体を作ることです。



## 【子どもの丘アカデミー】

大地の誕生会に、18本のろうそくが灯された。13歳：私は学ぶ喜びを知りました。14歳：私は仲間の素晴らしさを感じました。15歳：私は創る喜びを知りました。16歳：私は外へ飛び出すワクワクを感じました。17歳：私は自然の厳しさと優しさを知りました。18歳：私は世界は可能性でいっぱいだと言うことを知りました。

そして、あなたが夜明けを告げる子どもたちを歌ったあと、8人の中高生たちに、日暮れて暗くなったホール内で、ろうそくの灯りとともに、ノンタン母さんの「山の上の火」のおはなしが語られた。

2014年5月7日：子どもの丘アカデミー開校。この前後の時代、大地の教育を求めて移住したり遠方から通園したりする家族がたくさん集まっていた。そして、親子共々一体となり熱い大地ライフを真剣に学び楽しんでいた。親同士の繋がりも強く、奇想天外・抱腹絶倒・本格登山などなどの企画が溢れていた。小学校入学を控えても、この大地時代が永遠に続くと思う毎日だった。案の定、小学校入学しても、大地とは違い、全く面白くない毎日。親も悩み、大地はどうしようかと相談していた。

5月6日の夜、相談していた中で、「それなら、自分たちで小学校を始めよう」と決め、夜中の9時から、大地の2階の現魔女の部屋の改装を始めた。黒板をつけて、椅子を並べて、それなりの教室にした。そして5月7日、一人だけの小学生で子どもの丘アカデミーは開校した。

そして、この家族と夜の勉強会を開始。そのうちに、当時の同級生の親たちも集まってきた。シュタイナー窓際のトットちゃんのトモエ学園 植の実学校などなど子どもにとっての学ぶ場などの勉強会を重ねていった。その中には、長男の妻も、一小学校の教諭として勉強会に参加していた。

次々に子どもたちが増えてきて、試行錯誤しながらアカデミーを楽しんだ。魔女の森のツリーハウス 薬草棟のログハウス建築 上越海岸サイクリング 北アルプス 裏銀座への登山 スキーバックカントリー 沖縄久高島修学旅行 この間 中学部もでき、幼稚教室大地（まだ認定こども園ではなく 私塾の幼稚教室）同様、親子で子どもとの時間をたっぷり楽しんだ。

そして、2020年の新型コロナウィルスとともに、アカデミーは ホームスクールに切り替わり、大地は、このエネルギーを引き継ぎ、大地おおぞらさんの時代に変わっていました。

そんなアカデミーの第一期生は18歳を迎え、大学入学となり、それを祝う会の一部で、先の誕生会が行われた。それに先立つ一ヶ月ほど前の土曜日のおはなし会の最中に、幼稚小学生とは思えない高校生っぽい集団が入ってきた。よく見ると、アカデミーの卒業生たち。そのうちの一人が車の免許をとったので、皆でドライブ（動物園）に行くらしい。当時の仲間全員が揃っていた。（中高生 男3名 女4名 どういうわけか 全員身長170センチは超えている）未だに仲がいい仲間である。

午後3時過ぎ、大地の2階の懐かしの魔女の部屋に全員集合。当時は、広い部屋に小さな子どもたちが揃っていたのに、今夜は、部屋が狭すぎて身動きできないほど、熱気がムンムンとしている。身体は大きくなってしまっても、心は当時のまま。もちろん、大人も 気心知れた当時のままである。親たちが、絵本の読み聞かせ おはなし そして、定番のキンディキンディの踊りなどで盛り上がり、当時のクラス新聞やエピソードなどで、1次会は2時間近くに及んだ。サバサンド・ロールケーキ（ケーキ作りをライフワークにしている高校生の手作り）俺のプリンなどのおやつが花を添えた。

6時頃から、懐かしのホールへ移動。誕生会が待ち受けている。第一期生の一人が170センチを超えている身体にシルクをつけて、両親と手を繋いで入場。定番の人形劇を見てから、先の18本のろうそくに火を灯した。皆の顔は、当時のままで、全員ろうそくの炎を見つめている。何を思ったことだろう。そして、山の上の火。ご存じの方もいるだろうが、高山の頂で、裸で寒さにからえている子どもが、遠く離れた所から励ましと応援のため火を焚いているその灯りをひたすら見つめて寒さを乗り切ったというおはなし。ノンタン母さんは、小学校6年生などの旅立ちの節目の子どもたちによくするおはなしである。中学生高校生の思春期の子どもたちにとって、どのように響くのだろう。

その後、しばらく懐かしのホールを眺めてから、第3部伝説の道頓堀に出かける。途中のルアンパバーンの提灯の居酒屋で一息ついてから、1年に一度だけ、この仲間としか行けないミスターードーナツとお好み焼きの道頓堀ツアーを楽しんだ。道頓堀では、子どもたちだけの空間で、当時のままで食べて飲んでいた。が、スマホの姿は見受けられなかつた。そういうえば、ほぼ全員が公立の小中学校はいかず、また3分の2の子どもたちは、ホームスクールで育っている。第一部第2部の片付けも、何も指図されずに誰もが積極的に行い、道頓堀のテーブルいっぱいのお皿やカップも、大人に先駆けてきれいに片付いていた。ホームスクールの子どもたちは、早朝アルバイト 山小屋バイト 自分のケーキの製造販売 経済の勉強など、自分の大好きなことを模索して社会経験を、積み重ね、大人たちから学んでいる。そして、自分のライフワークを探しながら、シュタイナー教育の究極の目的である「自由への教育」「自由への大人の道」を歩んでいる。彼らの成長から学び、考えることが多い時間であった。子どもの人生の背景には、やはり親。

多様性の時代とは、わがままを受け入れるのではなく、あくまでも、大人両親の凜とした人生に源があると思う。

